槍ヶ岳とわたし

穂　苅　康　治（槍ヶ岳山荘）

山小屋の３代目として、家業を継ぐために、平成元年に17年勤めた商社を辞し松本に戻った。家内と結婚するときに、岳父に「娘は勤め人にやったわけではない。山小屋の経営者に出した。」と言われたことを覚えている。岳父も40歳の年に商社を辞めて山岳写真や風景写真を始めて一時代を風靡した人だ。岳父は、北海道の美瑛の丘に通い多くの写真を撮り景勝地にして地域振興につなげた。

槍ヶ岳の小屋に入って最初は、藤原正人支配人に相談するばかりで、何もできなかった。登山道や石垣の整備は毎年しなければならんとか、大事なことをたくさん教えてもらったと感謝している。彼はまた、遭難救助によく出動してくれた。非力な私にとっては、神様みたいな人だった。また横尾の橋がしっかりとできていないころ、穂苅新道という歩荷道を明神から横尾の出合にかけて開削したことがあったが、叔父と叔父の旧制高校の友人と３人で１週間ほどで開削したそうだ。

祖父穂苅三寿雄は、槍ヶ岳山荘、槍沢ロッヂ、大槍小屋の創業者で大正６年に槍沢のババ平に松本の六九町の青年会の有志とともに槍沢小屋を建てた。しかし、思った以上に利用者は少なく、出資者は減って、最後は後に常念小屋を開いた山田利一氏と二人で運営することになった。牧の小林喜作氏には食料の荷揚げから、登山ガイドまで大変世話になったと聞いている。大正７年の穂高縦走、槍沢から赤沢山、西岳、大天井岳、燕岳の新登山路の踏査、大正８年の裏銀座の縦走とさして余裕のない家計の中、祖父は頑張ったと思う。祖父はその後、大正10年に大槍小屋を赤沼千尋氏と建設するも雪崩や積雪のために大変苦労をしたと聞いている。

祖父は赤沼千尋氏と遭難したことがあり、わたしには大学山岳部等に入ることを禁じていた。祖父が亡くなってから一時山岳部に入ったことがありましたが、やはり山で滑落事故を起こしてしまい、膝を痛めて槍穂高の一般ルート以外は以後近づかないようにしている。祖父、父、岳父と山岳写真に縁があるので小生もと思っているが、なかなかまともな写真が撮れずに困っている。最近は小屋のスタッフも写真撮影をするようになり、槍ヶ岳山荘のカレンダーには小屋のスタッフの写真も使うようになってきた。

槍ヶ岳山荘のライブカメラは、長野オリンピック以来ずっと続けている。槍ヶ岳の今の状況が下界にいて見ることができるので、登山者やライブカメラの愛好家にも好評で気象予報の会社等にも使ってもらっている。「山の日」制定の年にはテレビ松本が４Ｋの映像でライブ映像を配信した。